

氏名 矢田(松本)勉

本論文は日本語史研究の一環として、日本語の文字・表記の歴史を特に平仮名・片仮名の成立した平安時代から活版印刷の導入された明治時代までを中心に論じたものである。全体は6編35章から構成されている。

第一編「文字・表記史研究の目的・方法・資料」では日本語の文字・表記体系を単に音声に対する副次的なものとしてではなく、それ自体独立した記号体系として扱おうとするものであることを述べ、これまで必ずしも厳密な定義が与えられて来なかった「片仮名」「草仮名」などの用語について検討を加え、新たな定義付けを行っている。

第二編「文字・表記史の原理」では日本語の文字・表記史を概観し、日本語では漢字文に日本語に応じた変化を与える方法(漢文の和化)と漢字の表意性を捨象した万葉仮名など(平仮名・片仮名)の二つの方式があったが、漢字文への仮名の混入の割合が高まり、また平仮名文・片仮名文への漢字の混入の割合が高まって、三つの文体は相互に接近し、最終的には現代の漢字平仮名交じり文が成立することになったとする。

第三編「平仮名史・平仮名文表記史の研究」では主として平安・鎌倉時代における平仮名の実態について、現存する資料に即して分析を加える。同音を示す平仮名の複数の字体(異体仮名)の種類は平仮名成立後、鎌倉時代の末までに二度、大きな変化の時期があり、そしてそれ以後の使用頻度の高い字体がやがて現行の平仮名字体になるとする。

第四編「漢字文表記史の研究」では漢字文の日本化したものとしての候文を取り上げ、候文が漢文に必須の返読を最小限とし、文末に必ず「候」を置くことによって、書きやすい漢文として成立発展したことを述べる。

第五編「印刷と文字・表記史」では、江戸時代の整版印刷、明治時代の活版印刷が日本語の文字・表記に与えた影響について述べ、前者では平仮名の字形の画一化が起こり、後者では句読点や濁点などの符号が文字と同格のものとして扱われるようになったとする。

第六編「文字意識史と文字研究史」では、江戸時代を中心にした文字の研究とその背後にある文字意識との関係について述べ、本格的な文字研究は新井白石に始まるとする。

本論文は、しばしば個別的に論じられてきた日本語の文字・表記の現象を一貫した原理や方法論を基礎に考察しようとしたものである。日本語と漢字が初めて接触した上代の文字・表記に関する記述がやや少ないなどの問題はあるが、全体の論旨は慎重でありながらも明快であり、特に平仮名の史的変遷や候文についての論はこの分野の研究を大きく推進するものである。よって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するとの結論に達した。